

## Stephen Meyer, John Lennox : 『潮流に逆らって』は無神論者の「力の政策」を一掃する

### 【Greatchain 訳注】

これは、インテリジェント・デザインの領域のみならず、現在の知的世界全体で、最も注目すべき対話ではなかろうか。ジョン・レノックスの知識と慧眼を、我々は「正しく怖れ」なければならない。このビデオは字幕付きなので、何度も読んで理解すべきものがある。

レノックスも解説者も言うように、明らかに、我々を支配しようとする者たちがいる。それが、力の政策（パワープレイ）を用いる「無神論科学者」たちである。無神論は有神論の反対語なのだから、神が存在しないというだけの、中立の立場だろうと考えるのは大間違いである。

解説者が最後の数行で、「これ以上は要約しない」と言っているのは、明らかに前の記事で警告された、最大の科学ジャーナルである「サイエンス」や「ネイチャー」の不気味な政治的動きのことである。レノックスも subtle（巧妙な）動きという言葉を何度も使っている。すべては繋がっている。共産主義というものが純粋な悪だということ、現在の米民主党の極左暴力主義の指導者たちが、明らかに神を敵とする者たちであることが、ここにきてわかってきた。

David Klinghoffer, [evolutionnews.org](http://evolutionnews.org)

October 19, 2020



*Against the Tide* (潮流に逆らって) という、一夜限りの映画の放映に先立って、科学哲学者スティーブン・マイヤーは、この映画に出演する、オックスフォードの数学者ジョン・

レノックスと対談し、彼の人生と思想を語りあった。その究極の問題は、「宇宙は、デザインするインテリジェンスの導きを示唆する〈しるし〉をもっているか？」だった。レノックスの答えは「イエス」である。ここで言っているように、彼は一生涯を通じてその問題を論じてきた。この素晴らしい対話を、読者はここで見ることができる：――

[https://youtu.be/zD50\\_1kicw4](https://youtu.be/zD50_1kicw4)

このイベントのチケットは全国の劇場で予約することができる。*Against the Tide* のウェブサイト：<https://againstthetide.movie> これは11月19日に一晩だけ放映される。

マイヤーとレノックスは、科学と神が対立しているという誤った考えを一掃する。真実はそうでなく、それは「力の政策、権威の政策」(power play, authority play)により、最も戦闘的な無神論者たちによって、真実が見えなくなっているのだと、レノックスは言う。現実には、「科学はどこを目指しているか？」という問題をめぐって、**有神論科学と無神論科学**の間に論争が起こっている。力の政策とは、これを、一方の有利になるように捻じ曲げるために、問題を仕組むことである。有神論者と無神論者は、この問題について、反対の見方に肩入れしている。しかし、しかしどちらも、自分が信ずる場所の現実の、ある特定の見方の、外側に出てみるということがない。「一人ひとりのすべての人間が、信仰の人なのだ」と、レノックス教授は言う。

### 3つの科学の理解

マイヤー博士が次の本 *Return of the God Hypothesis* (神仮説の帰還) で詳しく論じているように、ここ1世紀間に起こった3つの科学の理解は、デザインの刻印を明らかにしている。まず、宇宙には始まりがあったということ、また、他にどう考えても説明できないやり方で、宇宙は生命のために微調整されているということ、更に、生命は情報に満ちあふれているということ。これが意味することから、無神論者は目をそらしている。

『潮流に逆らって』は、非凡な、非常によくできた生命物語、科学、そして旅行談からなっている。レノックスは偉大な人柄をもつ人物である。彼は、最大の知能をもつ人、有神論者や無神論者たちからも、学ぶとともに、議論も行っている――C・S・ルイスから、フレッド・ホイル、リチャード・ドーキンズに至るまで。彼は、かつての「鉄のカーテン」の背後にも広く旅をし、マイヤーに語っているように、彼はそこで、あるアイロニーに気づいた。その大学で、十分な資格を得た無神論者が、有神論者を激しく叩いている大学は、キリスト教徒の創始した大学だった。共産主義の下では、大学は、国家の支配する、そして民衆をプロパガンダで動かす、機械に変わってしまう。もし西洋でも、最も厳格な無神

論者や唯物論者が勝利するようなことがあれば、彼らの大学でも、同じ運命が待っているだろう。我々も、我々自身の大学で、〈柔らかい全体主義〉の風潮とともに、この特定の力の政策（パワープレイ）の匂いが嗅ぎとれるようになった。

私は、この限りなく人を魅するディスカッションを、これ以上要約しようとは思わない。あなた自身で、これをご覧になるようお願いする。